2012. 12. 18(火)

第１回演奏会
リレーション’70

本日は「リレーション'70」の第１回演奏会にご来場頂き、誠に有難うございます。

1970年11月22日、東京文化会館小ホールにて「室内楽'70」の第1回演奏会が行われました。以降、1979年まで毎年１回ずつ計10回の演奏会を重ね、「室内楽'70」は毎回の演奏会で２作品、当時を代表する邦人作曲家への新作委嘱を行いました。計20作品を世に送り出したこの活動は、邦人作品の普及と発展に貢献しただけでなく、日本における現代音楽のアンサンブルグループの先駆け的な役割も果たしました。

第1回演奏会から42年の月日が流れ、「リレーション'70」は「室内楽'70」の全委嘱作品の再演を目的に結成致しました。全４回シリーズの演奏会は、今後も第2回(2013年9月8日)第3回(2014年6月27日予定)第4回(2015年3月予定)と続いていきます。「室内楽'70」が築き上げた功績を辿り、皆様と共有できますことを、心から楽しみにしております。加えて「リレーション'70」も毎回新作委嘱を行います。第1回の今回は、目覚ましい活躍を続けておられます、若手作曲家の山根明季子氏に委嘱いたしました。

また、「リレーション'70」の演奏会は、たくさんの方々のご助力があり、開催が実現致しました。資料の発掘や作曲家のプロフィールの作成など、評論家の西耕一氏には多方面に渡りご協力頂きました。演奏不可能と思われた三枝成彰氏の作品の演奏において、株式会社メイ・コーポレーション、並びに、ローランド株式会社の両社には多大なご尽力を賜りました。さらに、ジパング・プロダクツ株式会社には「リレーション'70」の企画当初から全面的にご協力頂き、演奏会当日の録音でもお世話になります。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

「室内楽'70」同様に、「リレーション'70」の活動も未来へ受け継がれていくことを、メンバー 一同願っております。それでは、最後までごゆっくりお楽しみください。

リレーション'70 一同

野口龍

永井由比

三瀬俊吾

大須賀かおり

日本演奏連盟/山田康子奨励・助成コンサート
後援/公益社団法人日本演奏連盟後援、日本現代音楽協会
協力：ジパングプロダクツ株式会社 、ローランド株式会社

野口龍 のぐち りゅう (フルート)

フルートを吉田雅夫、林リリ子の両氏に師事。桐朋学園短期大学音楽科在学中にABC交響楽団入団。後に日本フィルハーモニー交響楽団入団。読売日本交響楽団入団。1970年「室内楽'70」結成。読売日本交響楽団を退団以後、独奏や室内楽に活発な活動を続けている。ことに現代音楽の分野において活躍は目覚しく、その実力は国際的レベルと評価されている。近年では、2002年より2006年まで「日本の室内楽・日本のフルート作品」2本立てのシリーズを企画、制作。特にシリーズ最後のリサイタルは、深い感銘を与えた演奏会として、各方面から絶賛を呼んだ。現在、桐朋学園芸術短期大学客員教授、上野学園大学客員教授。「東京フルートアンサンブル・アカデミー」メンバー。2002年第11回朝日現代音楽賞受賞。

永井由比 ながい ゆい (フルート)

桐朋学園大学短期大学部卒業、同専攻科、研究生修了。 現代音楽コンクール競楽、東京音楽コンクール等に入賞。 これまでに、ISCM国際現代音楽祭、東京室内歌劇場でのロシア公演、サントリーサマーフェスティバルでの出演など現代音楽分野で活発に活動する他、子供たちへの音楽ワークショップやアウトリーチ活動などもライフワークとしており、これまでに、学校、養護施設などでのアウトリーチ、子供対象のワークショップの公演は400回を越えている。(財)地域創造公共ホール音楽活性化事業登録アーティスト。桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。ムラマツフルートレッスンセンター講師。

三瀬俊吾 みせ しゅんご (ヴァイオリン)

東京音楽大学卒業後、桐朋学園大学院大学修了。第１回横浜国際音楽コンクール弦楽器一般部門第１位。同コンクールより奨学金を得、パリ・エコール・ノルマル音楽院へ留学。第６級研修課程及び室内楽のディプロムを取得。同音楽院にて、ドゥヴィ・エルリ、原田幸一郎の両氏に師事し、マスタークラスや音楽院内での演奏会などに出演。定期的に千々岩英一氏の指導も受け、パリでソロ・室内楽や新作の演奏活動も行う。日本では「第１回室内楽－ＯＴＯ 三瀬俊吾のヴァイオリンとともに」に出演し７作品の新作演奏を行う。2010年帰国。2009年から毎年、名古屋、神戸、鎌倉、東京などでリサイタル開催。2010年に、世界中の現代作品を紹介している「mmm...」を結成。2011年には現代音楽グループ「淡座」を結成し、旗揚げ公演を行うなど、現在はソロや室内楽を中心に活動中。

大須賀かおり おおすが かおり (ピアノ)

桐朋学園大学音楽学部卒業、同大学アンサンブルディプロマコース修了。日本室内楽コンクール第2位。2001年、甲斐史子(Vn.)とデュオROSCOを結成、2002年、第5回現代音楽演奏コンクール競楽V優勝、第12回朝日現代音楽賞受賞。現音秋の音楽展2003において受賞記念リサイタル開催。2003年度青山バロックザール賞受賞。これまでに数多くの初演、録音に携わり、韓国大邱国際音楽祭、北京国家交響楽団との共演による日中現代作品の初演、北京中央音楽院、上海音楽学院などでのレクチャーコンサートなど、アジアでも幅広く活動。ジパングレーベルより2枚のアルバムをリリース。2010年には世界の作曲家を紹介する現代音楽アンサンブル「mmm...」を結成。また同アンサンブルにより東日本大震災チャリティー企画音楽配信プロジェクト「ヒバリ」を始動、世界からの１００人の現代音楽作品を録音、配信した。これまでに三上桂子、藤井一興、故G・山根美代子の各氏に師事。神奈川県立弥栄高校芸術科、昭和音楽大学付属音楽教室講師。

Program

三善晃	オマージュ (1970) (Fl.野口龍)
別宮貞雄	朝の歌 (1975/76) (Fl.野口龍)
平吉毅州	三人の奏者のための即興曲 (1970) (Fl.永井由比)
山根明季子	柘榴色の曖昧な欠片 (委嘱新作) (Fl.永井由比)

--休憩 15分-

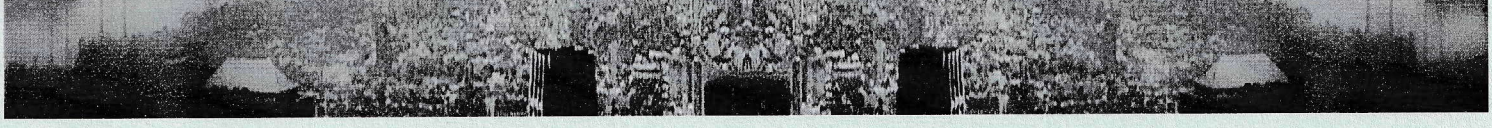
三枝成彰	3+α → 404 (初演) (Fl.永井由比)
林光	WONDERLAND 1 (1972) (Fl.永井由比)
松村禎三	アプサラスの庭 (1971/75) (Fl.野口龍)

Program Notes

三善晃 -室内楽'70のためのオマージュ- (1970)

Avec Toutes Mes Amitiés
à Trois Artistes
Mr. R.NOGUCHI
Mr. S.UEKI
Mr. H.WAKASUGI
「室内楽'70」の結成を祝って、三善晃さんが、こんな素敵な曲を贈ってくださいました。
今後も私どもの演奏会の開幕を、いつもかざらせていただきます。
(初演時、曲目解説より)

三善晃 (1933-)
1933年東京生まれ。3歳の頃から自由学園の「子供ピアノ・グループ」でピアノ、ソルフェージュ、作曲を学び、小学校に入った頃から平井康三郎に作曲とヴァイオリンを習う。後に池内友次郎にも師事。1951年東京大学文学部仏文科に入学。在学中の1953年《クラリネット、ファゴット、ピアノのためのソナタ》が第22回日本音楽コンクール作曲部門第1位、翌年《ピアノと管弦楽のための協奏交響曲》が第３回尾高賞、文化庁芸術祭奨励賞を受賞し注目される。1955年給費留学生としてパリ音楽院に留学、アンリ・シャラン、レイモン・ガロワ・モンブランに師事。アンリ・デュティーユの影響も受ける。1957年帰国、東京大学に復学し1960年に卒業。この頃から毎年のように大作を発表しており、管弦楽、室内楽、歌曲などのほか、多くの合唱曲がある。1995年から98年まで《夏の散乱》、《谺つり星》、《霧の果実》、《焉歌・波摘み》と毎年オーケストラ作品を発表、《焉歌・波摘み》では自身６回目の尾高賞を受賞した。1999年3月には初めてのオペラ《支倉常長「遠い帆」》を発表、その成果により第31回サントリー音楽賞を受賞。1974年～95年まで桐朋学園大学学長を務める。1999年12月芸術院会員となり、2001年11月文化功労者に選ばれる。
(東京コンサーツのプロフィールに加筆修正) (文責：西耕一)



別宮貞雄 -朝の歌- (1975/76)

音楽は“うた”と“おどり”から全く、はなれてはありえない、私にはこう思える。現在、まさかただの長短調、また３拍子や４拍子で、新鮮な音楽がかけるとは思わないが、しかし私が、単に中心音をもつだけではない、或種の旋法的性格をもつ調性にこだわり、また自由リズムに走れないのはそのためである。私はずうっとこうして音楽をかいて来た。反動などという大それた気持もなかったが、ただ現代の流行からは遠くはなれた気持でいた。それが近頃、調性の復活の新風があるときいて、芸術の世界の有為転変を思う有様。しかし、この曲は、私の作品の中でも特に調性感の強いものになった。それは別に時流をみたからではなく、たまたまはじめに思いついたアイディアが、第1楽章、完全４度下行テトラコルドのオスティナートだったからであろう。別に忠実に何かをうつす、標題音楽ではないが、朝まどろみの中から、次第に“うた”が生まれでて、さわやかな活気にうつってゆく、そんな気分を音に定着できたらよかろうとは考えた。
(初演時、曲目解説より)

別宮貞雄（1922-2012）
ベルリン留学経験もある父のレコードを聴いて幼少から洋楽に親しんでいたが、ピアノは19歳でバイエルから始めた（結核で1年の療養中に妹の弾くのを真似たのがきっかけ）。旧制一高のクラブ活動ではヴァイオリンと男声合唱（高田三郎の指導であった）を、さらに東大物理、後に美学へと進むが、研究心が高じて池内友次郎に作曲を師事。この頃は小倉朗や吉田秀和と交友を深め、1946年毎日音楽コンクールで2位、翌年も2位、翌々年は歌曲集《淡彩章》で1位となり作曲家への道を決めた。その後、パリ音楽院へ留学、ミヨーとメシアンに師事。矢代秋雄、黛敏郎が同期となる。音楽院の試験では、審査委員長だったフロラン・シュミットに「日本の希望の星」と期待をかけられた。ミヨーの言葉「音楽に古い新しいの別はない。よい音楽とわるい音楽があるだけだ」は、別宮が新旧に偏見を持つことなく、様々な音楽へ心を開いた所以である。別宮は、ミヨーから精神、メシアンから技術を学んだと語っている。帰国後は桐朋や中央大学で後進を育てた（中村紘子や堤剛も教え子）。その創作は4つのオペラ《三人の女達の物語》《有馬皇子》《葵上》《井筒の女》、5つの交響曲、ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、ヴィオラへの協奏曲、ソナタ、歌曲、合唱曲と満遍ない。いずれも別宮特有の自然な歌心と書法・構築性が見事に寄り添った音楽であり、数多くの賞を得ている。
(文責：西耕一)

平吉毅州 -三人の奏者のための即興曲- (1970)

今年の正月、私はアルコールの魔力に心地よく身を任せながら仲間とポーカーのスリルを楽しんでいた。野口龍さん達から電話がかかって来たのは、手の中フラッシュのチャンスが濃厚で意気込んでいた時だったのでシブシブ受話器をとってみると「これこれシカジカで、３人の為の曲を書け」という。正月早々楽しい話、とばかり引き受けてしまい、そのあとは早くも曲の事が頭を侵略しはじめて勝負にならず、結局大敗を喫してしまった。曲はところどころ演奏者の即興に任せられた部分を持つが、それは作曲者と演奏者が一体となって音を楽しみ合う、といった最良の意味での遊びの精神で全曲を貫ぬこうとした必然的な結果である。そして演奏者が、彼等３人であるから、私はそれを楽しむ事が出来るのである。
(初演時、曲目解説より)

平吉毅州（1936-1998）
音楽好きの両親のもと、兵庫で生まれ育つ。高校時代は伊熊義穂、東京藝術大学、同大学院では長谷川良夫に作曲を師事する。1962年に《管弦楽のコンポジション》で毎日音楽コンクール第1位を得てデビュー。以後は、第18回尾高賞作品《交響変奏曲》(1969)、《オルガンとオーケストラのためのバラード》(1974)、《ヴァイオリンとオーケストラのためのレクイエム》(1975)、《ギター協奏曲》(1980)、《独奏ティンパニーとオーケストラのための「海のある風景」》(1981)などの管弦楽曲２だけでなく、弦楽合奏、吹奏楽、打楽器、邦楽器、ミュージカル、バレエ音楽、様々な編成へ良質な作品を次々と発表した。なかでも室内楽'70の第1回演奏会のために委嘱初演された《3人の奏者のための即興曲》(1970)は『音楽芸術』1972年2月号に自作分析を執筆したほどであった。世間一般によく知られるのは1974年のNHK全国学校音楽コンクールの課題曲にも選ばれた合唱曲《気球にのってどこまでも》であろう。合唱曲は80曲以上を残したが、多くが現在も広く愛され、歌い継がれている。また、《虹のリズム》(1979)に代表されるこどものためのピアノ曲の数々は現在でも人気が高い。教育者としては桐朋学園大学、沖縄県立芸術大学、東京藝術大学で教鞭を執った。
(文責：西耕一)

山根明季子 -柘榴色の曖昧な欠片- (委嘱新作)

Ambiguous garnet colored fragments

例えば恋愛ホルモンPEAのような、不安定な状態というのは、心に負荷がかかりつつも、魅力的かつ中毒的なもので、そのような甘さと痛さが混ざり合った模様を描き、更にそれを解体しようとしました。作品は、とある楽曲のマテリアルを核として引用し、輪郭を崩しながら、装飾をして、深紅に飾り立てました。私は「音を耳で視る」「音の模様をデザインする」というように、音というのは実際に目で見るものでは無いのですが、視覚的な観点から音楽作品を作っています。今回、柘榴(ざくろ)色という色を考えるにあたって、色の構造と音の構造の理論的変換が中々私の感覚的認識と合致せず、今後もその点を追求していきたいと考えています。人によって異なる感覚、皆様にはどのように聴こえるでしょうか。

山根明季子

京都市立芸術大学卒業、同大学院修了。ブレーメン芸術大学派遣留学。作曲を澤田博、松本日之春、前田守一、中村典子、川島素晴、ヨンギ・パク＝パーンの各氏に師事。2006年第75回日本音楽コンクール第1位および増沢賞、2010年第20回芥川作曲賞などを受賞。これまでにNHK交響楽団、読売日本交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、いずみシンフォニエッタなどのオーケストラや国内外のアンサンブル並びに多くの演奏家によって作品が委嘱、また上演されている。2011年京都にて作品個展及びサウンドインスタレーションを行う。同年avant dossierよりCDシングル「水玉コレクション No.06」をリリース。現代音楽コンサートシリーズ「eX.(エクスドット)」主宰。京都市立芸術大学非常勤講師を経て、現在は、東京を中心に国内外において積極的な創造活動を展開している。

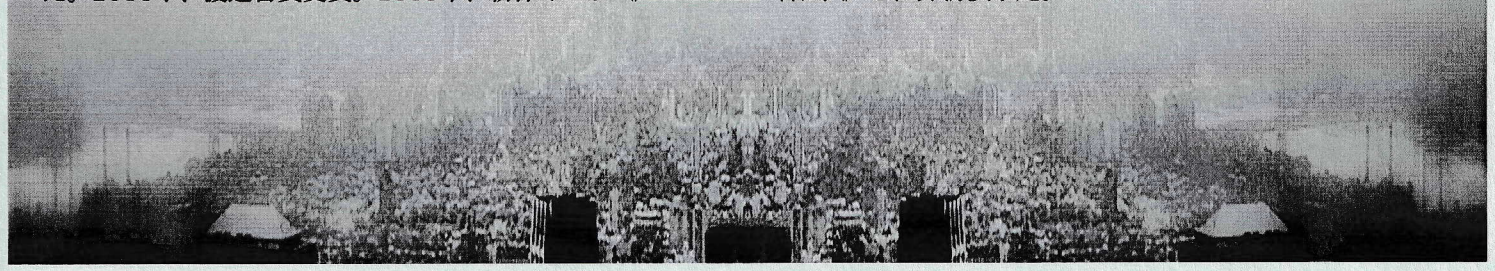
http://akikoyamane.com

三枝成彰 -3+α → 404- (初演)

この曲は1970年代に作曲したものですが当時は演奏される事無く終わりました。今回、若い演奏家達によってこの曲が初演される事となり大変嬉しく思っております。編成はリコーダー3本、フルート、エレキヴァイオリン、オルガンという特殊な編成になっています。また各楽器間で拍も合っていない為、毎回違う演奏になります。正直、数十年前に書いた曲が演奏されるとあって多少の不安も感じています。演奏を聴いてあまりの恥ずかしさに、その場から逃げ出したくなってしまうかも知れません。もちろん演奏家達の技量の問題ではありません(笑)。しかし、今回この曲に初演の機会を与えてくれた演奏家達に心より感謝し、本番の演奏を楽しみたいと思います。

三枝成彰

作曲家　日本交響楽振興財団理事　日本現代音楽協会理事　全日本ピアノ指導者協会理事　日本作編曲家協会副会長　日本モーツァルト協会理事長　東京音楽大学教授。1942年生まれ。東京芸術大学卒業、同大学院修了。代表作にオラトリオ《ヤマトタケル》、オペラ《千の記憶の物語》。映画《優駿》《お引越し》《機動戦士ガンダム～逆襲のシャア～》《機動戦士Ｚガンダム》、ＮＨＫ大河ドラマ《太平記》《花の乱》。1997年には、構想に10年の《忠臣蔵》を初演。なお同作品のＣＤとビデオは、日本人のオペラとしては初めて、世界27ヵ国で発売されている。著書に《大作曲家たちの履歴書》ほか。2004年、プッチーニのオペラ《蝶々夫人》を下敷きにした新作《Jr.バタフライ》を世界初演（2005年再演》。このオペラは2006年、イタリア・プッチーニ音楽祭でも再演された。この再演は同音楽祭の歴史における初の外国人作品の上演であり、プッチーニ以外の作品としても初の上演ともなった。2007年、紫綬褒章受章。2008年、モノオペラ《悲嘆》、ピアノ協奏曲《イカの哲学》を世界初演したほか、日本人初となるプッチーニ国際賞を受賞。2010年、《忠臣蔵》を再構成したオペラ《忠臣蔵》外伝を初演した。2011年、渡辺晋賞受賞。2013年、新作オペラ《KAMIKAZE--神風--》を世界初演予定。



林光 -WONDERLAND 1- (1972)

純粋にフルート、ヴァイオリン、ピアノだけをつかって、しかもこの編成にしみついている古典的なある感じから、できるだけ自由に書こうとしました。
昔ふうにいうなら、私、ことしかぞえ42才の厄年です。この曲をもって厄払いとなりますように。また、そのチャンスをつくってくださった「室内楽'70」の友人たちに感謝をささげます。
(初演時、曲目解説より)

林光（1931-2012）
東京神楽坂で生まれ、尾高尚忠と池内友次郎に習い、自由学園で早期教育を受けた。1953年には外山雄三、間宮芳生等と山羊の会（後に助川敏弥が参加）を結成。同年の藝大中退は学外発表による大学側の態度と既成作曲家への疑問から。管弦楽、器楽、合唱、オペラ、演劇、映画音楽、様々なジャンルに及ぶ活動は、こんにゃく座、東京混声合唱団等多くのプロ・アマ合唱団、映画監督、劇団、緋国民楽派…と二人三脚で行った。林は「現代音楽に人間のうたを…」と、黛敏郎の「現代音楽に神を…」に絡めて言ったが「人間のうた」とは覚えやすいメロディーでも民族主義でも大衆路線でもなく、「今日の状況、ぼくらの時代」がもたらすもの。他人事ではなく、常に自分の問題として書いた。数多いソングはそのような意思の結晶。声楽曲は勿論として、器楽曲にも反映されている。代表作は1958年に《水ヲ下サイ》を発表して2001年《永遠のみどり》までかけて完成された合唱曲《原爆小景》、傑作として誉れ高い《ヴィオラ協奏曲》(1995)、3つの交響曲、ギターや木琴の協奏曲、ピアノ・ソナタ、弦楽四重奏等々。JASRACの作品データベースに登録されている林光の作品数は1257曲。その膨大な作品群はCD20枚(約25時間)、400ページの書籍で『林光の音楽』としてまとめられている。
(文責：西耕一)

松村禎三 -アプサラス(飛天)の庭- (1971/75)

この曲は一年程前室内楽70の三人の方々の依嘱を受け、今年の６月始めから11月始めにかけて作曲したものである。フリュート、ヴァイオリン、鍵盤楽器による三人の奏者に限定されることが条件で、この条件は私にとってこの五ヶ月間かつて経験しなかった種類の苦しい桎梏となった。この組み合わせで私自身の世界を見付け出すために又してもフリ出しに戻ることを余儀なくされた。
結果は今日お聴き下さる如きものとなった。
"飛天の庭"という題名は曲の内容とは直接関係をもっていない。ただこの曲の作曲期間中私の座右にはいつもアンコールワットの中庭の写真が開かれてあった。そこではデヴァダーやアプサラスの像が霊妙な表情を湛えて千年の月日の中で踊りつづけていた。音楽作品にある限定されたイメージをもちこむのは危険だと承知し乍らも私はこの題名をつける衝動をおさえきれなかった。
(初演時、曲目解説より)

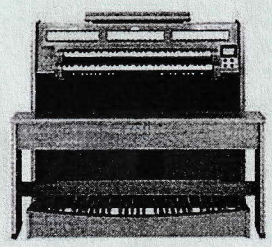
松村禎三（1929-2007）
京都で生まれ育つ。旧制第三校等学校理科を卒業後上京。池内友次郎に師事して藝大を受験するも、両肺結核が見つかり5年半に及ぶ療養生活を行い、一時は死の淵をさまよった。松村はその経験を、病身で動けぬままに一点を見つめて事物を考えたことは仏教の坐禅にも近い境地であったと語る。そのように物事を凝視して根源から考える思考法は作曲にも現れる。デビューは、結核の癒えるなかで書き始めた管弦楽曲が毎日音楽コンクール第1位(1955)を得てからである。これを機に伊福部昭へも作曲を師事。根源を見つめる思考法は、「生命の根源に直結したエネルギー」「アジア的発想による音楽」へ至り、《弦楽四重奏とピアノのための音楽》(1962)や《交響曲第1番》(1965)を経て、《管弦楽のための前奏曲》(1968)、《ピアノ協奏曲第1番》(1973)、同第2番(1978)に繋がる。サントリー音楽財団の委嘱によるオペラ《沈黙》(1993)には13年をかけた。大規模作品から、室内楽まで幅広く重要作があるが、昨今は《ゲッセマネの夜に》(2002)に代表される晩年の創作へも再評価が進んでいる。尾高賞、サントリー音楽賞、毎日音楽賞、モービル音楽賞、京都音楽賞大賞など受賞多数。映画音楽は100作、演劇音楽は50作を数える。教育者としては東京藝術大学、東京音楽大学、相愛音楽大学で教鞭を執った。著書に『松村禎三句集 旱夫抄』（深夜叢書社）、『松村禎三 作曲家の言葉』（春秋社）がある。
(文責：西耕一)

Roland
WE DESIGN THE FUTURE

ルネサンスやバロック時代を彩った古楽器が、
最先端の技術で、より身近に生まれ変わりました。
ローランド・クラシック・シリーズ誕生。

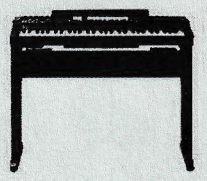
ROLAND CLASSIC

大聖堂をおごそかな響きで満たしたパイプオルガン、宮廷音楽を軽やかに歌い上げたチェンバロ、劇場やサロンで人々を魅了したポジティブ・オルガンなど…。古楽器の魅力を身近に、コンパクトにかなえたローランド・クラシック・シリーズ。教会での礼拝や自宅練習など、幅広いシーンでご活用いただけます。木のぬくもりがやさしい外観、演奏しやすい操作パネル。もちろんデジタルですので調律は不要です。往時に思いを馳せながら、古き良き音色を楽しむ。このうえない贅沢なひとときを、ご堪能ください。



荘厳なパイプの響きをもっと身近に。
夢のオルガン演奏をかなえます。

クラシック・オルガン
C-330 オープン価格
●専用椅子付き



さまざまな古楽器の音をコンパクトに。
古楽アンサンブル演奏にも最適な一台。

クラシック・オルガン
C-230 オープン価格

バロックが優雅に響く暮らし。
現代に蘇った最先端のチェンバロ。

電子チェンバロ
C-30 オープン価格

※別売：C-230／C-30専用固定椅子BNC-29 税込価格¥18,000（商品価格 ¥17,143）

お問い合わせは… ロジャース営業グループ ☎03-3251-1390 平日 9:00～17:45 E-mail: ros@roland.co.jp

ローランド株式会社

ローランド・クラシック・シリーズWEBサイトはこちら http://www.roland.co.jp/classic/